



曲 戲

或る男と信仰の巡査

木 村 鍊 戒

子 (ハーモニカを吹き乍ら歸つて来る) 只今。

母 今日は大へん長い散歩ね何處まで行つたの。

子 西谷から、本山の庭を通つて来たんだけど、いつ行つても思親閣や鷹取山の夕景色は美しいのね
ねねお母さん、甘露門を出ると少し坂でせう。

母 どうかしたの。

子 あの坂の左の方で犬がとて、遠吠してゐただけど、何にか變つた事は無いでせうか。「お父さんはまだ?」

母 小さな事が出来て今出かけた處なの。

子 いやだなあ、こんな小さな村によく事件が起るんですね。あれお父さんが又何にか引ばつて來

た様だ。

(巡查青ざめた或る男を連れて登場、母子急いで次の間に入る)

巡查 中へ這入れ

或男 (無言のままうなだれてゐる)

巡查 コラツ、這入らんか、ふるわてゐるぢやあないか。

(或男無言のまま這入る、巡查も入り座敷へ上る)

巡查 サ、上へ登れ。

(或男躊躇しながら澁々上る)

巡查 君はどうしても死にたいと云ふのか。

(あはたぶしく電話の鈴べるが鳴る)

巡查 (電話口にて) ア、さうだ……。大丈夫ここに居るよ……。おい／＼来るな来るな。

(或男無言のままうつむいてゐる、双方共しばし無言)

巡查 なあ君、君の死なうと云ふ其の心に、僕あ感心したよ。然し誰も一度は死ななくてはならぬと云ふことを心得てゐるだらうな。

或男 ……ハイ。

巡査

そしたらもう少し眞面目に、眞剣に考へてみ玉へ。親から與へられた此の有限の人生を何うして一番有意義に、そして生き甲斐ある人生にするか。そこだ君、僕は死の爲に死を考へろとは云はない。(だんだん聲高くなる) 人生の死その「死」を正しく理解する事に依て、正しい「生命」の手縛が得られるんだよ、日蓮上人のある時の言葉に「先づ臨終の事を習うて後他事をならうべし」と云はれてゐる。何だつて君はあんな薬を買に行つたんだ、死んだつて別に佛様は罪を許しては呉れないよ。(或男益眞面目に一言一句漏さじと聞き入る) これあ僕の懇意の坊さんの話したが、如何に過去に罪障があつてもあくまで正直な信仰と、熱願とが有つたならばきつと罪障は消滅して、反對に佛様は幸福を與へて下さると云ふ事だ。君の死なうした刹那の心、その心を信仰の方面に向けたらごうだ。さうすると必ず母親も安心するよ。(言ひ終ると) 愛子「お茶一つたのむ」

或男

ごうも有難うございます、始めてよく解りました。これからは眞面目に必ず立派に生きやうと骨を折りませう、よく解りました、有難うございます。

巡査

さうだ、立派に生きる爲に佛法を信じて佛様のみ教を仰ぐ事だ。よく解つて下れた。(巡査快心の笑を漏らす)

或男

檀那、お袋は正直でよく信心してゐるんだが、ごうして子は亡くなり妻は述げるやうな不幸が

起るんでせう。

巡查

そこだ、その心が純真であるほど、一培多くの苦惱を引き受けるのが此の世の矛盾した定めなんだ、信仰はこの苦しい世界を切り拓き、曲つた生活を叩き直す苦しい努力なんだ。さうして其の苦しみと同化して苦を怖れなくなつた時、本當に安樂の世界に到達する、それが日蓮上人の示された「現世安穩」の世界なんだよ。

或男

ああ有難たうございます、ようく解りました。(喜びの色顔に溢れる)

巡查

愛子、すまないがお茶をもう一つさして呉れないか。(或男に向ひ) どうか君、これから三門へ行つて正道に這入つた報告をしたらどうか。一所に行かう。

或男

どうも大變御手数煩はしました。どうかそれでは一所に御願ひ致します。

巡查

ぢやあ行かう。(二人立ち上る)

―を は り―